

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370412

研究課題名(和文)カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語・ミティラー語演劇写本

研究課題名(英文) Dramatic Manuscripts in Bengali and Maithili languages preserved in the Kathmandu Valley

研究代表者

北田 信 (Kitada, Makoto)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：60508513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ネパール国カトマンドゥ盆地の先住民ネワール族(チベット・ビルマ語系)が建てたマッラ王朝の15世紀～17世紀初頭に、外来言語ベンガル語(新期インド・アーリア語系)を用いて書かれた演劇写本群を研究した。これらはベンガル語で初めて散文の会話文を記録した重要な資料であり、従来のベンガル語文学史研究を刷新する潜在力を持つものである。また今日まで受け継がれるネパールの伝統芸能の様子を記録した初期の資料としても意義深い。そこには写本が書かれた時代に生きる人々の感性が如実に表現され、さらにそれが現代のネパール人の感性に直接的に繋がっていること、そしてそれは高度に発展した複雑な内容をもつこと、を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Study of the dramatic manuscripts written in Bengali, an imported language, by Newari authors from the 15th century until the beginning of the 17th century of Malla dynasty situated in the Kathmandu Valley of Nepal. These manuscripts are important documents in which prose conversational texts in Bengali were written down for the first time. These evidences have the potential to revise the historical study of Bengali literature. These texts are significant in the point that they put on vivid record the sensitivity of people of the time when they were written. As the result of this study, it was elucidated that the sensitivity of today's Nepali people is directly derived from the sensitivity of the Malla period, and that this sensitivity has actually highly developed profundity and complication.

研究分野：南アジア研究、インド学

キーワード：外国文学 印度哲学 東洋史 演劇学 文化人類学

## 1. 研究開始当初の背景

インド文化圏の周縁部に位置するネパール・カトマンドゥ盆地には、インド本土で消滅してしまった様々な文化要素が保存されている。よく知られているのは、ネパール国立古文書館に所蔵される膨大な量のサンスクリット語写本群であるが、その他にもサンスクリット語より後の言語発達の諸段階（アパブランシャ語、新期インド・アーリア諸語古形）を示す資料も豊富に残っている。20世紀初頭にこの地を調査したベンガル人の文献学者ラーフル・サーンクリティヤーヤンによって、ベンガル語（新期インド・アーリア語東部方言群）の最古の資料『チャリヤーパダ』の写本が発見されたことは、インド言語学研究史における最もセンセーショナルな事件のひとつに数えられる。さらに興味深いことに1980年代に至り、ベンガル人の学者シャンプシャン・ダスグプタがカトマンドゥ盆地に行き現地のネワール金剛乗仏教僧を訪ね、『チャリヤーパダ』以外にもアパブランシャ語や新期インド・アーリア語東部方言群の歌詞を記した写本が多数保存されていること、また、これらの歌詞が口伝され「チャチャー」と呼ばれる儀礼歌として金剛乗仏教の秘儀において実際に演奏されていることを確認した。

チャチャー歌に関するダスグプタの研究は文献学的な側面に限られ、しかも彼は研究半ばにして死去してしまったため、その研究については今まであまり進展していなかった。平成21年度より筆者は若手研究(B)補助金を受け、カトマンドゥにおいて現地調査を行った。それは現地のネワール仏教僧に弟子入りしてチャチャー歌の歌謡実践を習得し、かつ、その寺院に伝えられる写本を文献学的に調査する、というものであった。

チャチャー歌や、それが演奏されるネワール仏教の諸儀礼を調査していくうちに、チャチャー歌にうたわれる金剛乗仏教の思想が、新期インド・アーリア語学研究にとって貴重な資料であるだけでなく、チベット・ビルマ語系ネワール族の精神文化にとって核心的な位置を占めることを知るに至った。この関連を明らかにするため、申請者はネパール・リサーチ・センターの古典ネワール語文献学の権威カーシーナート・タモート教授を訪ね、その手ほどきを受けながらマッラ朝時代に著された文学作品の写本を解説・調査した。その過程で次のような興味深い事実が明らかになった。

カトマンドゥ盆地に残る新期インド・アーリア語の写本は、『チャリヤーパダ』と『チャチャー歌』にとどまらず大量に存在する。これらはマッラ朝時代にネワールの王族の庇護のもと、インド東部出身の文人が著した戯曲および抒情詩であり、中世ベンガル語・ミティラー語で書かれている。演劇台本に記載される登場人物の台詞は自然な会話体である。従来知られていた新期インド・アー

リア語の資料はたいてい韻文で書かれており、このように会話体を豊富に記録した資料のこれほど早い存在は前代未聞であるから、これらの写本は極めて貴重な言語資料であるといえる。

中世ベンガル語・ミティラー語文学史研究において、カトマンドゥ盆地の演劇作品は今まではほぼ無視された状態にあったから、これらの写本はインド東部中世文学史のミッシング・リンクを埋める重要な資料となるだろう。

## 2. 研究の目的

(1) カトマンドゥ盆地の先住民であるチベット・ビルマ語系ネワール族が興したマッラ王朝においては外来言語のベンガル語・ミティラー語が文学語として用いられ、多数の優れた演劇作品（戯曲・抒情詩）が著された。これらの作品は、ネワール文字で書かれた写本としてネパール国立古文書館に保存されている。上述の通りこの時代の演劇文献はインド本国のベンガル・ミティラー地方には全く残っていないから、これらの写本は、新期インド・アーリア語東部方言群による演劇台本（会話文）の貴重な資料である。さらに、これらの戯曲・抒情詩は写本として残っているだけでなく、今日でもカトマンドゥ盆地内のさまざまな場所でネワール族の農民によって口伝され、朝夕、方々の寺院で御詠歌として歌われている。写本と口承をあわせて研究し、インド東部の中世文学史の失われた空白を埋めることを目的とする。

(2) カトマンドゥ盆地のベンガル語・ミティラー語演劇の伝統は16世紀頃に始まるが、時代が下るとネワール族自身の作になるものが出現し、さらに18世紀にはこれを模範として古典ネワール語による演劇作品（戯曲）が著されはじめる。つまりベンガル語・ミティラー語の文芸潮流が、カトマンドゥ盆地の個性的な地方文化の創生の契機となる、という興味深い文化伝播過程が、演劇写本を調査することにより解明できよう。

これらの写本はベンガル語・ミティラー語文学史を大幅に書き換える可能性をもつ貴重な資料群であるにもかかわらず、先行研究はそれほど多くない。ベンガル人の学者による校訂は、60年代に数点出版されたのを最後に途絶えている。ドイツ人の学者ブリンクハウスは戯曲『プラバーヴァティ』の優れた校訂本・研究を出しているが、その後この分野での仕事をやめてしまった。一方、現地カトマンドゥではネワール族の研究者による校訂本がいくつか出版されているものの、ごく簡易的にとどまっている。研究が停滞している理由は、これらの写本で古いベンガル語・ミティラー語が用いられていること、ネワール古文字で記されていること、また台詞以外の演技指示は（演技をするのがネワール族の役者であったため）古典ネワール語で書かれていること、古典ネワール語がサンスク

リットの崩れた語形を多量に含む非常に難解な言語であること、などの、何重もの障壁に阻まれているからであろう。

### 3. 研究の方法

研究の主要な部分は演劇台本や演劇に関連する歌詞集などを、写本を用いて研究することである。研究したのはネパール国立古文書館に所蔵される写本であり、ネワール古文書学の専門家カーシーナート・タモート教授とともに解説作業を行った。研究した演劇台本はどれも、台詞の部分はベンガル語もしくはミティラー語で書かれるが、時折差しはさまれる舞台指南は古典ネワール語で書かれている。

演劇写本の文献学的研究と並行して、カトマンドゥ盆地およびインド・ベンガル地方で実際に演じられる様々な伝統芸能を現地調査し、演劇文献と対照させて研究した。

### 4. 研究成果

(1)【平成 25 年度】8 月にカトマンドゥ盆地を訪れ、ムスンバハー僧院においてチャチャー歌（ラーガ・マラシュリー、ラーガ・グルジャリー）に関する聞き取りを行い、さらにネワール伝統歴グンラー月の仏教徒の催しとして、サンスクリットの仏教経典を信者たちが朗誦する様子を調査した。スワヤンブーナート仏塔では、ネワール語による讃歌（バジャン）が盛大に歌われる様子を観察した。また先祖を迎えて演劇、滑稽劇、音楽舞踊などでもてなす、日本のお盆に似た祭りガイ・ジャットラ（牛の行進）において、ネワール族の芸能に関する調査を行った。

2 月のカトマンドゥ訪問の際にはタモート博士と新期インド・アーリア語東部方言の初期形による演劇写本『四幕よりなるラーマ劇』を解説した。この作品は今から約 400 年前に著された作品であるが、アプブランシャ語から新期インド・アーリア語に移行する時代の不思議な言語によって書かれた興味深い言語資料である。さらにスワヤンブーナート仏塔やチャング・ナラヤン寺院など今日も盆地内に残る代表的な歴史的建造物に関する出来事が記述されており、歴史資料としても貴重であることが判明した。

ムスンバハー寺にてチャチャー歌（ラーガ・トラヴァリ、ヒンドール、カーモード）を記録した。

研究協力者のサワン・ジョシは 3 月にカトマンドゥ盆地のネワール族の住む複数の都市・集落（パタン、バクタプル、パナウティ、サンクー）においてダファー音楽の聞き取り調査を行った。パナウティやサンクーは古い時代から栄えた町であるが、ダファー音楽の伝統は、伝承者の高齢化・死去などで風前のともしびであることを確認した。またパタンの王宮前広場で毎年 11 月頃に催される舞踊劇カルティク・ナーチの台詞には古ミティラ

一語の歌詞が混じっていることが判明した。

こうして新期インド・アーリア語史の研究にとって、カトマンドゥは新発見の宝庫であるということが平成 25 年度の調査で再確認された。

#### (2)【平成 26 年度】

タモート教授と、パタン国王ブランダラシンハ（1560-1597）の治世に著されたベンガル語劇『悪魔ジャーランダラ退治』およびパタン国王シヴァシンハ（1597-1619）の治世に著されたベンガル語劇『クリシュナ物語』の写本を解説した。この二つの戯曲からはこの時代のパタン王国の歴史を読み取ることができ、歴史的資料として価値がある。また言語的にみると、この二つの戯曲で使われているのは中期ベンガル語の最初期の形態である。

さらにムスンバハー僧院において Gandha-mandala (Raga Malhar), Varahi-vyasthita (Raga Tvadi) という二つのチャチャー歌に関する聞き取りを行った。前者は儀礼の初めに歌われ大地を聖化する役割を持つ。後者は猪の頭をもつ女神に捧げる曲である。Tvadi は北インド古典音楽のラーガ名称トーディーに由来する。

さらにカトマンドゥ盆地南端に位置するネワール族集落ファルピンで伝統芸能継承者ダルマラージ・ヴィシュヌ・バラミー氏に聞き取りを行い、毎年行われるカルティク・ナーチという演劇祭の演目の中に、マッラ王朝時代に人気があった戯曲『マダーラサ一姫の誘拐』が含まれることを確認した。

インド・西ベンガル州北西部の農村には現在でもジュムルと言われる民謡ジャンルが伝承されており、これについて現地調査を行った。ジュムルの原型と思われるものはサンスクリットの音楽文献にも言及され、さらに中世ベンガル語の最初期の宗教的抒情詩と見なされるボル・チョンディダシュ作『クリシュナ賛歌』にジュムルと共通する特徴が見られることが示唆されている。興味深いことに『クリシュナ賛歌』の写本はインド・西ベンガル州バンクラ県とカトマンドゥ盆地で発見された。今日ジュムルの伝承される地域（西ベンガル州バンクラ県・プルリア県）は、ベンガルからネパールに向かうルートと重なり、ベンガルとネパールの伝統芸能を結ぶリンクの解明に重要なヒントを与えてくれるものであることが判明した。

#### (3)【平成 27 年度】

2015 年 4 月に起こった震災によりカトマンドゥ盆地も大きな被害を被った。その後も社会的な混乱がなかなか収まらなかったため、やむを得ず夏の現地調査先をインドに変更した。9 月にインド・西ベンガル州プルリア県で伝統芸能ジュムルを調査・録音録画した。ジュムルは男性達の楽しむ大衆娯楽で、一人の女性ダンサーと複数の男性楽師の楽団か

らなる。歌詞はクリシュナ神と恋人ラーダーや牧女たちの愛の伝説に題を取ってはいるものの、ベンガル農村の日常生活に即した事物が多く読み込まれ、土俗的な艶歌としての性格が強い。ジュムルを調査した理由は、ジュムルの歌詞が、中期ベンガル語最初期の作品であるボル・チョンディダシュ作『クリシュナ讃歌』に類似する、としばしば指摘されるからである。『クリシュナ讃歌』は、14世紀頃のベンガルの西部辺境で著され、その作風はベンガル・ヴィシュヌ派の宗教歌が洗練される以前の古く土俗的な要素を色濃く残し、今日に伝わるジュムル伝統の原型であろうと推定される。この書物の写本断片が何故カトマンドゥで発見されたのか、その理由を解明することは今後の重要な課題であり、またマッラ王朝初期に戯曲がベンガル語を用いて著されていたことと無関係ではないだろう。

このほかに西暦1561年にパタン国王ヴィシュヌシンハがベンガル語で著した演劇写本『パリージャータの誘拐』を解説した。この作品には王の家族の人名が幾つも言及されており歴史的資料としての価値も高いことが判明した。

12月に国際ベンガル学会において『クリシュナ讃歌』写本断片発見についての発表を行った。3月にはフランス国立東洋言語文化研究所において、カトマンドゥの演劇伝承と演劇写本について講演し、ベンガル文学・ネワール演劇の研究者達と意見交換を行った。フランスではネパールやヒマラヤ地域の民族学的研究（特に民族芸能・演劇学）の先端的な研究がなされており、単なる局所的な地域研究に閉じこもらず、大きな視野をもってレヴィ・ストロースを初めとするフランス流の民族学・文化人類学や現代的な表象文化論に本研究を繋げて行く可能性や、本研究の成果を国際的に発表していくことの意義を大いに認識した。

#### (4)【平成28年度】

最終年度は16世紀後半から17世紀初頭の時期にカトマンドゥ盆地東端に位置するバクタプル王国で著された作品『ヴィディヤーヴィノーダ姫』(Vidyavinoda)を解説・分析した。これは男が花売り女に変装して後宮に忍び込み王女と通じる、という世俗的な物語を扱ったもので、出典は明らかではないが、古代インド文化圏に広く伝播したブリハット・カター説話集の系統に属する可能性がある。写本についてはネワール文字とベンガル文字が入り混ざった状態で筆記されているという他に類を見ない奇妙な状態が見られる。巻末のコロフォンにはデリーを拠点としたトゥグルク王朝の王フィーローズ・シャーの名前が言及される。物語は唐突に、男女が密会の現場を取り押さえられるという悲劇的な終末を迎えるが、これが果たして元からそうなのか、あるいは写本には本来その続き

があったが切断されているのかは、現時点では判断できない。

9月にカトマンドゥ市で行われるインドラ・ジャットラ（帝釈天祭）では仮面舞踊デビ・ナーチ（女神の舞踊）その他の伝統芸能を調査した。これらの芸能を観察して特に印象に残ったことは、悪魔(daitya)が必ずしも完全な悪役としては扱われない、ということである。たとえばデビ・ナーチでは、恐ろしい憤怒の女神に打倒される悪魔の役は、豪華な装束を纏った眉目秀麗な青年により演じられ、それが戦いで力尽き敗北する様は哀愁を帯びている。伝承者の意見によれば、100%の悪者というものはなく敗者側にもそれなりの言い分があるのが常だから、ということである。これがはたしてアーリア族に圧倒されるチベット・ビルマ族の悲哀の歴史を反映するものなのか、証明することはできないが、いずれにせよインドから輸入された文化要素が、カトマンドゥ盆地に入るとこの土地独自の解釈が加えられ、インドとは違った微妙なしかし意味深長なニュアンスの変化や力点移動が認められる。

11月にはパタン市の王宮前広場で行われるカルティク・ナーチ演劇祭を調査し、クリシュナ神と牛飼娘たちとの衣やヨーグルトをめぐる諍いを描いた舞踊劇を記録した。これはマッラ朝期の演劇伝統を受け継ぐものである。今回観ることができなかったが、ヴィシュヌ神の化身・人獅子が悪魔と戦う演目が、祭りの目玉なのだという。

カルティク・ナーチ演劇祭は盆地南端の山村ファルピンに住むバラミ・カーストの農民によっても行われている。こちらの伝統の方が古い（西暦1473年）という言われがあり、そして実際、今日でも古いスタイルを忠実に守っているようである。今年の演目は、奇しくも男が花売り女に変装して王女の住む後宮に忍び込む、というエピソードを含み、ヒンドゥー教神話（二大叙事詩やプラーナ古譚集）ではなく世俗的な物語を扱っている点上記の戯曲Vidyavinodaに通じる点がある。

物語は複雑怪奇であり、表面的にはお伽噺のよう見えながら、臣下の裏切りや、信頼されている人物の心に突如湧き上がる黒々とした嫉妬や食欲など、人間の制御しがたい感情の揺れ動きがリアルに描かれる。

このように題材は世俗的であるのにもかかわらず、演劇祭は儀礼的性格を失わない。日暮れから夜明けまで10時間以上続く上演の最後には子ヤギが生贄とされ、ファルピン村に隣接する聖地ダッチン・カリに祀られる黒い女神カーリーに捧げられる。劇中、主人公が処刑場に引立てられる場面では、自らの不運を嘆き為政者を批判して泣き叫ぶのだが、これを演じる役者は昂奮のあまり一種のトランス状態に没入していく。人間の生々しい感情が宗教的法悦に変容していくのだ。

ファルピンの演劇祭の特徴的なハイライ

トの一つは劇中に挿入される悪魔の登場と戦いの場面であると見なされる。ここでも上述の“悪魔に対するポジティブな位置づけ”が観察される。他の登場人物が擬古調ヒンディー語や現代ネパール語の台詞を話すのに対し、悪魔たちは大多数の観客の母語であるはずの現代ネパール語を話すのである。

劇中、器楽伴奏つきで様々な歌が演奏されるが、これらはインド古典音楽理論の旋法を意味する用語「ラーガ」というジャンル名で呼ばれる。これらは昔から伝承されてきた固定旋律であり、現代の北インド古典音楽のラーガとは異なり即興的な要素を含まない。個々のラーガは、それぞれ特定の登場人物に結びついており、その登場人物が舞台上で演技する際にのみ演奏されるが、こうした音楽と劇中人物の連関は、インド古典演劇理論やそれに基づいた絵画伝統（ラーガ・マラー細密画）を彷彿とさせ興味深い。実は同様のラーガと劇中人物の連関は、平成 25 年度に研究した早い時代に恐ろしく古風な言語を用いて書かれた『四幕よりなるラーマ劇』（上述）の中でも示唆されている。

以上みてきた通りファルピン村の演劇祭は、古い要素をかなり忠実に受け継いでいるということが観察されるが、他方、古い演目を毎年新しく演出し直しており、そこには舞台監督の個性や現代の趣向が反映される余地が大いにある。演者は 10 代・20 代の青年男性を中心とし、これを村中の老若男女様々な観客が鑑賞し娯楽を得るのである。

このようにマッラ王朝期から続く演劇伝統は今なお生きており、現代ネパール人の精神文化を入れる器（形式）として機能している。そこに描かれているのは高度で複雑な人間心理の揺れ動きである。カトマンドゥ盆地の場合、一見、単純素朴にして無邪気に演じられているように見える伝統芸能が、丹念に彫琢された古典的芸術を本歌取っていることがよくあり、現代の芸能伝承を観察する際に忘れてはいけないことであろう。マッラ朝期の演劇写本の文献学的研究によって、ネパール文化の深淵を解明することができるかと確信する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Makoto Kitada, A fragment of Baru Candidasa's Srikrisnakirtan newly discovered in Kathmandu, *International Journal of South Asian Studies*, Vol. 8, 2016, 35-48、査読有

② 北田信、カトマンドゥ山村に伝わる仮面舞踊劇—ファルピン村のカルティク・ナーチ、*印度民俗研究*第 15 号、2016、21-35、査読無 [http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/56222/1/ind15\\_021.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/56222/1/ind15_021.pdf)

③ 北田信、ジャガッジュヨーティル・マッラ作戯曲『マダーラサー姫の誘拐』（後半）、*印度民俗研究*第 14 号、2015、45-84、査読無 [http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/51409/1/ind14\\_045.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/51409/1/ind14_045.pdf)

④ 北田信、カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語・ミティラー語写本『マダーラサー姫の誘拐』（その 1）、*印度民俗研究*第 13 号、2014、65-84、査読無 [http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/27068/1/ind13\\_065.pdf](http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/27068/1/ind13_065.pdf)

⑤ 北田信、カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語・ミティラー語写本、*南アジア研究* 26、2014、査読無

〔学会発表〕（計 7 件）

① Makoto Kitada, *Nepalese Tradition of Dance-Drama*, 南アジア研究会（関西）、2016 年 12 月 18 日、大阪大学中之島センター（大阪市）

② 北田信、カトマンドゥの舞踊劇（帝釈天の祭り）と宮廷舞踊劇・現地調査報告）、*科研「声と文字」*第 2 回研究会、2016 年 12 月 4 日、大阪大学中之島センター（大阪市）

③ Makoto Kitada, *Singing Books: Traditional performing arts and manuscripts in Kathmandu*, 2016 年 3 月 18 日、東洋言語研究所（パリ・フランス）、講演

④ Makoto Kitada, *Report on the fourth song of Caryapada sung in Kathmandu and the newly discovered fragment of Baru Candidas' Srikrisnakirtan*, 国際ベンガル学会、2015 年 12 月 12 日、東京外国語大学（東京都府中市）

⑤ サワン・ジョシ（研究協力者）、ネパールのダファー音楽の伝承と理論について、*日本南アジア学会*第 27 回全国大会、2014 年 9 月 28 日、大東文化大学（埼玉県東松山市）

⑥ 北田信、音楽と絵画：北インド古典音楽と南アジアの美意識、*京大 CIAS「宗教実践における声と文字」*研究会、2013 年 12 月 15 日、京都大学地域研究総合センター（京都市）

⑦ 北田信、ネパール族の古典文学、チベット・ビルマ言語学研究会第 30 回会合、2013 年 12 月 7 日、神戸大学大学共同利用施設 UNITY（兵庫県神戸市）

〔図書〕（計 1 件）

北田信、ネパールの村歌舞伎、*インド通信* 460 号、2017 年、4-6

## 6. 研究組織

（1）研究代表者

北田 信 (Kitada, Makoto)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：60508513